

イエス・キリストの啓示-その四

イザヤ書四十章

Jeff Pippenger

2023-10-23

いま封印が解かれつつあるイエス・キリストの啓示のメッセージには、「真理」と訳されるヘブライ語の語の特定が含まれており、それは、ほかのことがらとともに、アルファでありオメガであるキリストの御性質を表している。物事の始まりがその終わりを表すという主題は聖書全体を貫いており、キリストは御言葉であられるので、その御性質は聖書のうちに現れている。アルファでありオメガであることは、キリストの御性質の一要素であり、キリストご自身がご自分が神であることの証として示されたものである。

イザヤ書四十章は、イザヤ書の終わりである六十六章まで続く預言的叙述の始まりを告げる。それは、遣わされる慰め主、すなわちキリストがご自分の去っていくことによる悲しみを慰めるために弟子たちに約束された方を明らかにすることから始まる。しかし、その慰め主の到来は、他のすべての預言と同様に、終わりの日にこそ完全に成就する。慰め主の到来をイザヤとイエスが明らかにしていることは、2020年7月18日に起こった十四万四千の運動における失望の出来事を指し示している。

しかし、私はあなたがたに真実を告げる。私が去っていくことは、あなたがたにとって益となる。私が去らなければ、助け主はあなたがたのところに来ない。しかし、私が去れば、私はその方をあなたがたのところへ遣わす。その方が来ると、罪について、義について、またさばきについて、世の誤りを明らかにする。ヨハネの福音書 16章7、8節。

「罪、義、さばき」という言葉は、慰め主が世を「責める」ために用いるものである。「責める」と訳される語には、納得させるという意味が含まれている。「罪、義、さばき」という三つの段階は、「真理」と訳されるヘブライ語の語を表している。その語は、ヘブライ文字の第一、十三、そして最後の文字から成り、万物の創造主が初めであり終わりである、すなわちアルファとオメガであることを表している。慰め主が失望している十四万四千人のもとに来られるとき、彼は彼らを、そして次いで世を、神はアルファとオメガであると納得させる。

慰めよ、慰めよ、わたしの民を、とあなたがたの神は言われる。エルサレムの心に語りかけ、彼女に呼ばわって告げよ。「彼女の戦いは終わり、その咎は赦された。彼女はそのすべての罪のために、主の御手から二倍の報いを受けたからだ。」荒野で叫ぶ者の声がする。「主の道を備えよ。荒れ地で、わたしたちの神のために大路をまっすぐにせよ。」すべての谷は高められ、すべての山と丘は低くされ、曲がったところはまっすぐにされ、でこぼこしたところは平らにされる。そして主の栄光が現れ、すべての人がともにそれを見る。主の御口がこれを語られたからである。イザヤ書 40:1-5

この箇所は、最後のエリヤの使者の働きを指し示している。その使者はウィリアム・ミラーによって予表され、ミラーはバプテスマのヨハネによって予表され、ヨハネはエリヤ

によって予表され、またマラキによって「契約の使者」のために道を備える使者として特定された者である。最後のエリヤ運動において、主が慰め主を遣わして、遅延の時に失望しつつも主を待ち望んでいる者たちを強めるとき、「主の栄光が現れ、すべての肉がともにこれを見る」。主の「栄光」とは主の御品性であり、イエス・キリストの啓示とは、アルファとオメガとして表されるその御品性の要素の封印が解かれることである。最初の五節の導入の後、「荒野で叫ぶ者の声」が神に「何と叫びましょうか」と尋ねる。

声は言った、「叫べ。」彼は言った、「何を叫べばよいのか。」すべての肉なる者は草、その麗しさはみな野の花のようだ。草は枯れ、花はしぼむ。主の霊がその上に吹きかけるからだ。まことに民は草である。草は枯れ、花はしぼむ。しかし、われらの神の言葉はとこしえに立つ。イザヤ書 40:6-8。

アルファとオメガとして表されるキリストの品性に関するメッセージは、イスラム教の象徴性の中に位置づけられている。エゼキエル書37章では、干からびた骨の谷がまず集められ、その後、四方の風の預言の言葉によって命を吹き込まれる。

天使たちは四方の風を押さえている。それは、つなぎを断ち切って全地を駆け抜け、その行く先々に破壊と死をもたらそうとする怒れる馬として表されている。

「永遠の世界のまさに間際にいながら、私たちは眠っていてよいのでしょうか。鈍く、冷たく、死んだような状態でいてよいのでしょうか。ああ、神の霊と息吹がその民のうちに吹き込まれ、彼らが自分の足で立って生きることが、私たちの諸教会において実現するように。私たちは、その道が狭く、門が狭いことを理解する必要があります。しかし、私たちがその狭い門を通り過ぎるとき、その広がりには限界がありません。」『Manuscript Releases』第20巻、217頁。

聖書の預言における怒れる馬はイスラム教である。怒れる馬は、ヨハネの黙示録7章で四人の天使が四つの風を押さえていることによって表されているように、破壊の業を行うことを引き止められている。その抑制は、十四万四千人に印が押されるまで続く。

この後、わたしは四人の御使いが地の四隅に立ち、地の四つの風を押さえて、風が地にも海にも、またどの木にも吹きつけないようにしているのを見た。さらに、日の出る方から上って来る別の御使いを見た。彼は生ける神の印を持っており、大声で、地と海に害を加える権威を与えられている四人の御使いに叫んで言った。「わたしたちが、わたしたちの神のしもべたちの額に印を押し終えるまで、地にも海にも木々にも害を加えてはならない。」ヨハネの黙示録 7:1-3

四つの風が押しとどめられていることは、神の民への封印が成就するまで、イスラム教が抑制されていることを表している。黙示録では、イスラム教は七つのラッパのうち最後の三つ、また三つのわざわいとして表されている。

そして私は見た。また、天の中空を飛ぶ一人の天使が大声でこう言うのを聞いた。「災いだ、災いだ、災いだ。地に住む者たちに、これから吹き鳴らされる三人の天使のラッパの残りの響きのゆえに！」黙示録 8章13節。

三つのわざわいのラッパを導入した後、ヨハネは第9章でイスラム教の特徴を明らかにしている。第9章4節ではイスラム教に対する命令が与えられており、それはムハンマドの後

の最初の指導者アブー・バクルの歴史において成就した。

そして彼らには、地の草にも、何の青草にも、どんな木にも害を加えてはならないこと、ただ額に神の印のない人々だけを害するようにと命じられた。黙示録 9:4

ユライア・スミスは、アブベクルと第4節との関係を明らかにした。

モハメッドの死後、西暦632年、指揮権はアブベクルが継いだ。彼は自らの権威と政權を十分に確立するとすぐに、アラビアの諸部族に宛てて回状を発し、以下はその抜粋である：

「主のための戦いをするとき、背を向けず、男らしくふるまえ。ただし、女や子ども血でその勝利を汚してはならない。ナツメヤシの木を一本たりとも切り倒すな。穀物畑を焼くな。果樹を切り倒すな。また、食べるために屠るもの以外の家畜に害を加えるな。いかなる盟約や取り決めを結んだときも、それを守り、約束どおりに行動せよ。道すがら、修道院に隠棲し、そのような仕方神に仕えようとしている敬虔な者たちに出会うであろう。彼らには手を出すな。彼らを殺してはならず、修道院を破壊してはならない。さらに、サタンの会堂に属する、剃髪した者たちにも出会うであろう。必ずその頭蓋をかち割り、彼らがマホメット教徒に改宗するか、貢を納めるまで一切容赦するな。」 ユライア・スミス『ダニエル書と黙示録』500頁

ユライア・スミスはさらに、ローマに戦争を仕掛けるためにアブベクルが派遣したイスラムの戦士たちによって区別されるべき二つの人々のグループを特定している。一方は日曜日に礼拝するカトリックの修道士、もう一方は第七日に礼拝する者たちである。イスラムは太陽の崇拜者だけを攻撃することになっていた。私たちの考察にとってより重要なのは、日曜日を守る者であれ安息日を守る者であれ、人々は象徴的に草、緑のもの、木々として表されているという点である。第七章の四つの風は、安息日を守る者に印が押されるまで、草に吹きつけることを差し止められていた。

十四万四千人の運動の使者は、神に「私は何と叫びましょうか」と問う。彼は、自分のメッセージは「神の御言葉はとこしえに堅く立つ」ということであり、そのメッセージは草の上に吹きつける風という文脈で語られるべきだと告げられた。イスラムに関する予言が外れたことで失望していた十四万四千人のもとに助け主が遣わされ、彼らその後、自分たちは十人の乙女のたとえの「遅れの時」にいるのだと認識すると、助け主は彼らに、彼らが提示すべきメッセージは聖書預言におけるイスラムの役割に関するメッセージであると知らせる。遅れの時の歴史における助け主の到来は、彼らを堅く立たせる。

彼は私に言った。「人の子よ、立ち上がれ。私はあなたに語ろう。」そして彼が私に語ったとき、霊が私のうちに入り、私を立たせ、私は私に語りかける彼の声を聞いた。エゼキエル書 2:1、2。

彼らはよみがえると立ち上がる。

また、あらゆる民族、部族、言語、国々の人々は、三日半の間、彼らの死体を見、彼らの死体が墓に葬られるのを許さない。地に住む者たちは彼らのことで喜び楽しみ、互いに贈り物を送り合う。これは、この二人の預言者が地に住む者たちを苦しめたからである。ところが三日半の後、神からのいのちの霊が彼らのうちに入り、彼らは立

ち上がった。彼らを見た者たちの上に大いなる恐れが臨んだ。ヨハネの黙示録
11:9-11.

立ち上がること、そして旗印として掲げられることという二つの段階は、エゼキエル書三十七章にも表されている。エゼキエルの第一の段階は、失望の谷にある干からびた骨の身体の諸部分を一つに集めることである。エゼキエルの第二の段階は、四つの風のメッセージであり、これは封印のメッセージであり、すなわちイスラムのメッセージである。

彼はわたしに言った。「人の子よ、この骨は生きることができるか。」わたしは答えた。「神である主よ、あなたをご存じです。」彼はさらにわたしに言った。「この骨に向かって預言し、彼らに言え。『干からびた骨よ、主の言葉を聞け。』『神である主はこれらの骨にこう言われる。見よ、わたしはあなたがたの中に息を入れ、あなたがたは生きる。わたしはあなたがたの上に筋を張らせ、あなたがたの上に肉を生じさせ、皮であなたがたをおおい、あなたがたの中に息を入れる。こうしてあなたがたは生きる。そうしてあなたがたは、わたしが主であることを知る。』」そこで、わたしは命じられたとおりに預言した。わたしが預言していると、音がして、見よ、震えが起こり、骨と骨がそれぞれ自分の骨に寄り集まった。わたしが見ていると、見よ、その上に筋と肉が生じ、さらに皮が彼らをおおった。しかし、彼らの中には息がなかった。すると彼はわたしに言った。「風に向かって預言せよ。預言せよ、人の子よ。風に言え。『神である主はこう言われる。四方の風から来よ、息よ。この打ち殺された者たちの上に吹きつけよ。そうして彼らが生きるように。』」わたしは彼が命じたとおりに預言した。すると息が彼らの中に入り、彼らは生き返り、足で立ち上がった。きわめて大きな軍勢であった。エゼキエル書 37章3-10節。

私たちが今考察しているイザヤ書の箇所では、慰め主が来られるとき、彼らは自分の足で立ち上がり、旗印として高い山の上に掲げられ、「良い知らせ」、すなわち後の雨、第三天使のメッセージを宣べ伝える。

良い知らせを告げるシオンよ、高い山に上れ。良い知らせを告げるエルサレムよ、力をもって声をあげよ。声をあげよ、恐れるな。ユダの町々に言え、『見よ、あなたがたの神を！』見よ、主なる神は力ある御手をもって来られ、その御腕は支配する。見よ、その報いは主と共にあり、その働きの実りは御前にある。主は羊飼いのように群れを養い、御腕に小羊を集め、懐に抱え、子を連れているものを優しく導かれる。だれが手のひらのくぼみに水を量り、一手幅で天を測り、地の塵を枘に入れて量り、山々をはかりで、丘を天秤で量ったか。

だれが主の霊を導き、その助言者となって主に教えたか。主はだれと相談し、だれが主に教え、裁きの道を教え、知識を授け、悟りの道を示したのか。見よ、諸国は桶のしずくのように、はかりの上の微塵のように数えられる。見よ、主は島々をごく小さなもののように取り上げられる。

レバノンの森も燃やすには足りず、その獣も焼き尽くす献げ物としては足りない。すべての国々は御前では無に等しく、主にとっては無よりもなお少ないもの、むなしなものとして数えられる。イザヤ書 40:9-17

墓から出てきた人々は、旗印として掲げられる。あるいは、イザヤが述べるように、彼らは「高い山」へ連れて行かれる。その高い山こそが旗印であり、それは2020年7月18日の

最初の失望によって始まった遅延の時に、主を待ち望んでいた者たちを表している。

ひとりの叱責で千人が逃げ去り、五人の叱責であなたがたは逃げ去る。あなたがたが山の頂の旗ざおのように、丘の上の旗印のように、取り残されるまで。それゆえ、主はあなたがたに恵みを施すために待っておられる。また、あなたがたをあわれむために、みずからを高くされる。主はさばきの神だからである。主を待ち望む者はみな幸いである。イザヤ書 30:17、18

黙示録11章では、旗印は天に取り上げられる。

そして、彼らは天から彼らに「ここへ上れ」と告げる大いなる声を聞いた。彼らは雲に乗って天に上って行き、彼らの敵はそれを見た。その同じ時刻に大きな地震が起こり、都の十分の一が倒れ、地震で七千人が命を落とした。残りの者たちは恐れおののき、天の神に栄光を帰した。ヨハネの黙示録 11章12、13節

黙示録11章は、地震と同じ時刻に二人の証人が天に引き上げられることを示している。過去の歴史においてフランス革命によって成就したその地震は、日曜法の時にアメリカ合衆国が転覆されることを象徴している。したがって旗印は日曜法の時に掲げられ、その旗印はその後「良き知らせ」を全世界に宣べ伝える。

全世界の住民よ、地に住む者よ、彼が山々の上に旗印を掲げるときには見よ、彼がラッパを吹き鳴らすときには聞け。イザヤ書18章3節

「ラッパ」が吹き鳴らされる時、「旗印」は「良い知らせ」を告げる。黙示録の最後の「ラッパ」のメッセージは第七の「ラッパ」であり、これは第三の災いであり、イスラムである。イザヤ、ヨハネ、そしてエゼキエルは皆、終わりの日々について語っており、互いに矛盾することはない。

日曜法の時、神の印が神の民に押される。

私たちのだれ一人として、品性に一点のしみや汚れがあるうちは、神の印を受けることはない。私たちの品性の欠陥を正し、魂の神殿をあらゆる汚れから清めることは、私たちに委ねられている。そのとき、ペンテコステの日に初めの雨が弟子たちの上に降り注いだように、後の雨が私たちの上に降り注ぐだろう。……

「兄弟たちよ、備えの大いなる業において、あなたがたは何をしているのですか。世と結びついている者たちは、世俗の型を受け、獣の刻印を受ける備えをしている。自分を頼みとせず、神の御前にへりくだり、真理に従うことによって魂を清めている者たちは、天の型を受け、額に神の印を受ける備えをしている。布告が発せられ、印が押されるとき、彼らの品性は永遠に純粹で汚れのないままでとどまる。」証言、第5巻、214-216。

法令が日曜法のときに施行されるとしても、印を受ける者たちは、日曜法の前に、印のために整えられた品性を備えていなければならない。というのも、日曜法こそ、神の御言葉に記されたあらゆる危機が最終的に指し示す危機だからである。それは、十人の乙女のたとえにある真夜中の「危機」、すなわち「叫び」である。

品性は危機によって明らかになる。真夜中に「見よ、花婿が来る。出て行って迎えよ」と切なる声が告げられたとき、眠っていた乙女たちは眠りから目を覚まし、誰がその出来事に備えていたかがわかった。両者とも不意を突かれたが、一方は非常時に備えており、もう一方は備えがないことが明らかになった。品性は状況によって明らかになる。非常時は品性の真価を引き出す。思いがけない災厄、死別、危機、予期せぬ病や苦悶、魂を死と真正面から向き合わせるような出来事は、品性の内実を露わにする。神の言葉の約束に対する真の信仰があるかどうか明らかになる。魂が恵みによって支えられているか、すなわち、灯とともに持つ器に油があるかどうか明らかになる。

「試練の時はすべての人にやって来る。神による試みと精錬のただ中で、私たちはどのように振る舞うのか。私たちのともしびは消えてしまうのか。それともなお燃やし続けるのか。恵みとまことに満ちておられる方との交わりによって、私たちはあらゆる非常時に備えているだろうか。五人の賢いおとめたちは、自分たちの品性を五人の愚かなおとめたちに分け与えることはできなかった。品性は、私たち一人ひとりが形成しなければならない。」 Review and Herald、1895年10月17日。

賢い乙女たちは、叫びが上がる前に油を持っていなければならなかった。真夜中の危機が訪れたときには、油を手に入れるには遅すぎるからだ。

「絶望と戦争と流血の霊があり、その霊はいよいよ時の終わりに至るまで強まっていく。神の民が額に印を受けるやいなや—それは目に見える印や標ではなく、知的にも霊的にも真理に堅く据えられて、動かされることがなくなる—神の民が印を受けて揺さぶりへの備えができたそのとたんに、それは来る。実際、それはすでに始まっている。神の裁きが今この地に臨んでおり、私たちに警告を与え、何が来ようとしているのかを知ることができるようにしておられる。」 『Manuscript Releases』 第1巻、249頁。

神の印とは、知的にも霊的にも真理に確立されることである。その印は目には見えないが、旗印は見える。世界に警告する唯一の方法だからである。ゆえに、印が見えない時期があり、その後には日曜法が続き、その時には印は見えなければならない。

聖霊の働きは、世に罪と義と裁きとを悟らせることである。世が警告を受けることができるのは、真理を信じる者たちが真理によって聖められ、崇高で聖なる原則に従って行動し、神の戒めを守る者とそれを足で踏みにじる者との間の境界線を、高尚な意味において示しているのを見ることによるのみである。聖霊による聖化は、神の印を持つ者と、偽りの安息日を守る者との違いを明確にする。試練が来るとき、獣の刻印が何であるかがはっきり示される。それは日曜日を守ることである。真理を聞いた後でもなおこの日を聖なるものと見なし守り続ける者は、時と律法を変えようと考えた罪の人の印を帯びている。聖書訓練学校、1903年12月1日。

日曜令の前に得なければならない印は、キリストの品性の完全な成熟であり、それは天使以外には見えない。日曜令のときに目に見える印は、第七日安息日を守る人々であり、それは神の民の印、すなわちしるしである。

あなたはまたイスラエルの子らに言え。「まことに、あなたがたはわたしの安息日を守らなければならない。これは代々にわたってわたしとあなたがたとの間のしるしであり、あなたがたを聖めるのはわたし、主であることを知るためである。」出エジプト記 31:13

十四万四千人の封印は2020年7月18日に始まり、日曜法の前に完了しなければならない。

全世界の住民よ、地に住む者よ、彼が山々の上に旗印を掲げるときには見よ、彼がラッパを吹き鳴らすときには聞け。イザヤ書18章3節

今や封印が解かれた七つの雷は、十四万四千人の歴史が、第三の災いのラッパによる警告という文脈の中に置かれたメッセージを宣べ伝える働きであることを示している。聖書預言におけるイスラムのラッパとは、墓から引き上げられて掲げられる旗印によって吹き鳴らされるものである。

1840年から1844年の歴史の四つの道標と一致する、すべての改革の路線の四つの道標は、各改革の路線の四つの段階が常に同じテーマを持つことを確証している。1840年から1844年によって表された十四万四千人の歴史における最初の道標は、2001年9月11日におけるメッセージの力付与であった。その道標はイスラムであった。十四万四千人に関する並行する歴史の第二の道標は、2020年7月18日の失望であった。その道標は、時の適用によって歪められたイスラムに関する予言であった。真夜中の叫びを画する第三の道標は、失敗したイスラムに関する予言の訂正である。その訂正は、時の適用の拒否を表している。第四の道標は日曜法であり、掲げられる旗印が第七のラッパを吹き鳴らす。それは第三の災い、すなわちイスラムである。

イザヤ書四十章は、続く二十六章の出発点を示している。その出発点は、民を苦しめた二人の預言者がよみがえらされるとき、すなわち黙示録十一章にある。慰め主が彼らを復活させて立たせ、その後、彼らは天に上げられる。イザヤはエリヤの使者を「荒野で叫ぶ声」として示している。その使者は自分が何を語るべきかを問い、預言的象徴において、イスラムのメッセージは旗印が告げ知らせるラッパの警告であると教えられる。だが、終わりの日にイスラムを警告のラッパとして提示できる唯一の方法は、過去のイスラムを見極めることによってである。ミラー派が理解したイスラムの始まり、そしてそれがハバクク二つの聖なる図表に図示されていることを用いて、第三の災いのイスラムを識別しなければならない。

主の日に私は御霊にあった。そして、背後からラッパのような大きな声を聞いた。黙示録 1:10

ヨハネは黙示録で、自分の背後にラッパの音のような声を聞いた。そしてヨハネは、過去からの声を聞く十四万四千人を表している。ヨハネの背後の声、すなわち過去からのラッパの響きを表すその声とは、ラッパが日曜礼拝に対する神の裁きであるという、先駆者たちの理解のことである。最初の四つのラッパは、321年にコンスタンティヌスが制定した最初の日曜令に依じて、異教ローマに下された。第一と第二のわざわいである第五と第六のラッパは、538年のオルレアン公会議で教皇ローマもまた日曜令を制定した後に、教皇ローマに対する神の裁きを表している。イスラムの第三のわざわいは、アメリカ合衆国

で日曜令が制定されるときに到来する。そのとき旗印が掲げられ、イスラムの初期の役割に基づいて、その預言的役割が明らかにされる。

旗印が告げるメッセージは、そのメッセージがアルファとオメガという文脈に置かれるときにのみ確立される。イザヤ書第40章のこの導入に続いて、連続するいくつかの章にわたり、アルファでありオメガである神に関する、聖書における最も力強く最も直接的な提示がなされる。これらの章は、イエスに「神がお与えになり」、「そのしもべたちに、まもなく起こるべきことを示すために、御使いを遣わして、そのしもべヨハネにこれをするしによって知らせ」、ヨハネがそれを「書物に書き記し」「七つの教会に送った」イエス・キリストの黙示を、イザヤが表現したものである。

次の記事では、イザヤ書の以下の章を取り上げます。

この預言のことばを読む者と、これを聞き、その中に書かれていることを守る者たちは幸いである。時が近いからである。ヨハネの黙示録 1:3